

## 校異源氏物語・すゝむし

夏ころはちすの花のさかりに入道のひめ宮の御ち仏ともあらはし給へるくやう  
せさせ給このたひはおとゝの君の御心さしにて御ねんすたうのくともこまかに  
とゝのへさせ給へるをやかてしつらはせ給ふはたのさまとなつかしう心こと  
なるからのにしきをえらひぬはせ給へりむらさきのうへそいそきせさせ給ひけ  
るはなつくゑのおほひなどのおかしきめそめもなつかしうきよなるにほひそ  
めつけられたる心はへめなれぬさまなりよるのみ丁のかたひらをよおもてなか  
らあけてうしろのかたにほ花のまたらかけ奉りてしろかねのはなかめにたかく  
ことくしきはなの色をとゝのへて奉り名かうにからの百部のくのえかうをた  
き給へり阿弥陀仏けうしのほさちをのく白たんしてつくり奉りたるこまかに  
うつくしけなりあかのくはれいのきはやかにちいさくてあをきしろきむらさき  
の蓮をとゝのへてかえうのほうをあはせたる名かうみちをかくしほゝろけてた  
きにほはしたるひとつかをりにゝほひあひていとなつかし経は六道の衆生のた  
めに六部かゝせ給てみつからの御持経は院そ御てつからかゝせ給ける是をたに  
この世のけちえにてかたみにみちひきかはし給ふへき心を願文につくらせ給へ  
りさてはあみた経からのかみはもろくてあさゆふの御てならしにもいかゝとて  
かむやの人をめてしことにおほせこと給てこゝろことにきよらにすかせ給へる  
に此春のころをひより御心とゝめていそきかゝせ給へるかひありてはしをみ給  
人くめもかゝやきまとひ給けかけたるかねのすちよりもすみつきのうへにか  
ゝやくさまなともいとなむめつらかなりけるちくへうしはこのさまなといへは  
さらなりかしこれはことにちんの花そくのつくゑにすへて仏の御おなしちやう  
たいのうへにかさらせ給へりたうかさりはてゝかうしまうのほり行かうの人  
くまいりつとひ給へは院もあなたにいて給ふとて宮のおはしますにしのひさ  
しにのそき給へればせはき心ちするかりの御しつらひにところせくあつけなる  
までことくしくさうそきたる女房五十人はかりつとひたり北のひさしのす  
のこまでわらはへなとはさまよふひとりともあまたしてけふたきまであふきち  
らせはさしより給て空にたくはいつくのけふりそと思ひはかれぬこそよけれふ  
しのみねよりもけにくゆりみちいてたるはほいなきわさなりかうせちのおりは

おほかたのなりをしつめてのとかに物の心もきゝわくへきことなればゝはかりなききぬのをとなひ人のけはひしつめてなんよかるへきなとれいのものふかゝらぬわか人とものようないをしへ給宮は人けにおされ給ていとちいさくおかしけにてひれふし給へりわかきみらうかはしからむいたきかくしたてまつれなどの給きたのみさうしもとりはなちてみすかけたりそなたに人ゝはいれ給しつめて宮にも物の心しり給へきしたかたをきこえしらせ給ふいとあはれにみゆおましをゆつり給へる仏の御しつらひみやり給もさまゝにかゝるかたの御いとなみをもゝろともにいそかんものとは思ひよらさりしことなりよしのちの世にたにかのはなの中のやとりへたてなくとおもほせとてうちなき給ひぬ

はちす葉をおなしうてなと契をきて露のわかるゝけふそかなしきと御すゝりにさしぬらしてかうそめなる御あふきにかきつけ給へり宮

へたてなくはちすのやとをちきりても君か心やすましとすらむとかき給へ

れはいふかひなくもおもほしくたすかなとうちはらひなかなをあはれと物をおもほしたる御気色なりれいのみこたちなともいとあまたまいり給へり御かたゝよりわれもゝといとなみいてたまへるほうもちの有様心ことにところせきまてみゆ七そうのほうふくなとすへて大かたのことゝもはみなむらさきのうへせさせ給へりあやのよそひにてけさのぬいめまてみしる人は世になへてならすとめてけりとやむつかしうこまかなることゝもかなかうしのいとたうとくことの心を申てこのよにすくれ給へるさかりをいとひはなれ給てなかきよゝにたゆましき御ちきりをほけ経にむすひ給ふたうとくふかきさまをあらはしてたゝいまのよのさえもすくれゆたけきさぎらをいとゝ心していひつゝけたるいとたうとければみな人しほたれ給ふこれはたゝしのひて御ねんすたうのはしめとおほしたることなれとうちにも山のみかともきこしめしてみな御つかひともあり御す経のふせなといとゝころせきまてにはかになむことひろこりける院にまうけさせ給へりけることゝもゝそくとおほしゝかとよのつねならさりけるをまいていまめかしきことゝものくはゝりたれはゆふへのてらにをき所なけるまて所せきいきをひになりてなん僧ともは帰けるいましも心くるしき御心そひてはかりもなくかしつきゝこえ給ふ院のみかとはこの御そうふんの宮にすみはなれ給なんもつゐのことにてめやすかりぬへきこえ給へとよそゝにてはおほづかなかるへしあけくれみ奉りきこえうけ給はらむことをこたらむにほいたかひぬへしけにありはてぬ世いくはくあるましけれとなをいけるかきりの心さしをたにうしなひはてしときこえ給つゝこの宮をもいとこまかにきよらにつくらせ

給ひみふのものとくにくのみさうみまきなどより奉る物ともはかくしき  
さまのはみなかの三条の宮のみくらにおさめさせ給又もたてそへさせ給てさま  
くゝの御たから物とも院の御そうふんにかすもなくたまはり給へるなどあなた  
さまの物はみなかの宮にはこひわたしこまかにいかめしうしをかせ給あけくれ  
の御かしつきそこらの女房のことゝもかみしものはくゝみはをしなへて我御あ  
つかひにてなといそきつかうまつらせ給ける秋ころにしのわたとのゝまへ中の  
へいのひんかしのきはおしなへてのにつくらせたまへりあかのたなゝとして  
そのかたにしなさせ給へる御しつらひなといなまめきたり御弟子にしたかひ  
きこえたるあまとも御めのとふる人ともはさるものにてわかきさかりのもこゝ  
ろさたまりさるかたにて世をつくしつへきかきりはえりてなんなさせ給けるさ  
るきをいにはわれもくゝときしろひけれとおとゝの君きこしめしてあるましき  
ことなり心ならぬ人すこしもましりぬれはかたへの人くるしうあはくゝしきき  
こえいてくるわさなりといさめ給て十よ人はかりのほどそかたちことにてはさ  
ふらふこのゝにむしともはなたせ給て風すこしすゝしくなりゆく夕暮にわたり  
給つゝむしのねをきゝ給やうにてなをおもひはなれぬさまをきこえなやまし給  
へはれいの御心はあるましきことにこそはあなれとひとへにむつかしきことに  
おもひきこえ給へり人めにこそかはることなくもてなし給ひしかうちにはうき  
をしり給ふ気色しるくこよなうかはりにし御心をいかてみえたてまつらしの御  
心にておほうは思ひなり給にし御よのそむきなれはいまはもてはなれて心やす  
きになをかやうになときこえ給そくるしうて人はなれたらむ御すまひにもか  
とおほしなれとおよすけてえさもしひ申給はす十五夜の夕暮にほとけの御まへ  
に宮おはしてはしちかうなかめ給ひつゝねんすし給わかきあま君たち三三人花  
たてまつるとてならすあかつきのをと水のけはひなときこゆるさまかはりたる  
いとなみにそゝきあへるいとあはれなるにれいのわたり給てむしのねいとしけ  
うみたるゝゆふへかなとてわれもしのひてうちすんし給ふ阿弥陀の大すいとた  
うとくほのくゝきこゆけにこゑくゝきこゑたるなかに鈴虫のふりいてたるほと  
はなやかにおかし秋の虫のこゑいつれとなき中にまつ虫なんすくれたるとて中  
宮のはるけきのへをわけていとわさとたつねとりつゝはなたせ給へるしるくな  
きつたふるこそすくなかなれなにはたかひていのちのほとはかなきむしにそあ  
るへき心にまかせて人きかぬおく山はるけきのゝまつ原にこゑおしまぬもいと  
へたて心あるむしになんありける鈴虫は心やすくいまめいたるこそらうたけれ  
などの給へは宮

大かたの秋をはうしとしりにしをふりすてかたきすゝむしのこゑとしのひ  
やかにの給ふいとなまめいてあてにおほとか也いかにとかやいておもひのほか  
なる御ことにこそとて

心もて草のやとりをいとへともなをすゝむしの声そふりせぬなど聞え給て

きんの御ことめしてめつらしくひきたまふ宮の御すゝひきをこたり給て御こと  
になをこゝろいれ給へり月さしいてゝいとはなやかなるほともあはれなるに空  
をうちなかめて世中さまゝにつけてはかなくうつりかはるありさまもおほし  
つゝけられてれいよりもあはれなるねにかきならし給ふこよひはれの御あそ  
ひにやあらむとおしはかりて兵部卿の宮はたり給へり大将のきみ殿上人のさる  
へきなどくしてまいり給へれはこなたにおはしますと御ことのねをたつねてや  
かてまいり給いとつれゝにてわきとあそひとはなくともひさしくたえにたる  
めつらしき物のねなときかまほしかりつるひとりことをいとうたつね給ける  
とて宮もこなたにおましよそひていれたてまつり給うちの御まへにこよひは月  
のえんあるへかりつるをとまりてさうゝしかりつるにこの院に人ゝまいり  
給ときゝつたへてこれかれかந்தちめなどもまいり給へりむしのねのさためを  
し給ふ御ことゝものこゑゝかきあはせておもしろきほとに月みるよひのいつ  
とても物あはれならぬ折はなき中にこよひのあらたなる月の色にはけになをわ  
か世のほかまでこそよろつ思なかざるれ故権大納言なにの折ゝにもなきにつ  
けていとゝしのはるゝことおほくおほやけわたくし物の折ふしのにほひうせた  
る心ちこそすれ花とりの色にもねにも思ひはきまへいふかひあるかたのいとう  
るさかりし物をなどの給ひいてゝ身つかからもかきあはせ給御ことのねにも袖ぬ  
らし給つみすのうちにもみゝとゝめてやきゝ給らんとかたつかたの御心にはお  
ほしなからかゝる御あそひのほとにはまつこひしう内などにもおほしいてける  
こよひはすゝむしのえんにてあかしてんとおほしの給御かはらけふたはたりは  
かりまいるほとにれんせいゐんより御せうそこあり御せんの御あそひにはかに  
とまりぬるをくちおしかりて左大弁式部大輔又人ゝひきゐてさるへきかきり  
まいりたれば大将などは六条のゐんにさふらひ給ふときこしめしてなりけり  
雲のうへをかけはなれたるすみかにもゝのわすれせぬ秋の夜の月おなしく  
はときこえ給へれはなにはかりところせきみのほとにもあらずなからいまはの  
とやかにおはしますにまいりなるゝこともおさゝなきをほいなきことにおほ  
しあまりておとろかさせ給へるかたしけなしとてにはかなるやうなれとまいり  
給はんとす

月かけはおなし雲井にみえなからわかやとからの秋そかはれることなる事

なかめれとたゝむかしいまの御ありさまのおほしつゝけられけるまゝなめり御つかひにさか月たまひてろくいとなし人ゝの御車したいのまゝにひきなをしこせんの人ゝたちこみてしつかなりつる御あそひまきれていて給ぬ院の御車にみこたてまつり大将左衛門の督とうさいしやうなどおはしけるかきりみなまいり給なをしにてかららかなる御よそひともなれはしたかさねはかり奉りくはへて月やゝさしあかりふけぬる空おもしろきにわかき人ゝふえなとわさとなくふかせ給なとしてしのひたる御まいりのさまなりうるはしかるへきおりふしはところせくよたけゝきゝしきをつくしてかたみに御らんせられ給ひ又いにしへのたゝ人さまにおほしかへりてこよひはかるゝしきやうにふとかくまいり給へれはいたうおとろきまちよろこひきこえ給ねひとゝのひ給へる御かたぢいよゝゝことのならすいみじき御さかりの世を御心とおほしすてゝしつかなる御有様にあはれすくなからすその夜の歌ともからの山との心はへふかうおもしろくのみなんれいのことたらぬかたはしはまねふもかたはらいたくてなむあけかたにふみなどかうしてとく人ゝまかて給六条の院は中宮の御方にわたり給て御物語なときこえ給ふいまはかうしつかなる御すまひにしはゝもまゐりぬへくなにとはなれれとすくるよはひにそへてわすれぬむかしの御物語なとうけ給はりきこえまほしうおもひたまふるになにゝもつかぬみのありさまにてさすかにうゑゝしくところせくも侍てなんはれよりのちの人ゝにかたかたにつけてをくれゆく心ちしはへるもいとつねなきよの心ほそさのゝとめかたうおほえ侍れはよはなれたるすまひにもやとやうゝおもひたちぬるをのこりの人ゝの物はかなからんたゝよはし給なとさきゝもきこえつけし心たかへすおほしとゝめて物せさせ給へなどまめやかなるさまにきこえさせ給れいといとわかうおほとかなる御けはひにてこゝのへのへたてふかう侍しところよりもおほつかなさのまさるやうにおもひ給へらるゝ有様をいとおもひのほかにもつかしうてみな人のそむきゆく世をいとはしうおもひなることも侍りなからその心のうちをきこえさせうけたまはらねはなに事もまつたのもしきかけにはきこえさせならひていふせく侍ときこえ給けにおほやけさまにてはかきりあるおりふしの御さとあもいとうようまちつけきこえさせしをいまはなにことにつけてかは御心にまかせさせ給御うつろひも侍らむさためなきよといひなからもさしていとはしきことなき人のさはやかにそむきはなるゝもありかたう心やすかるへき程につけてたにをのつからおもひかゝつらふはたしのみ侍るをなとかその

人まねにきほ御たうしんはかへりてひか／＼しうおしはかりきこえさする人もこそ侍れかけてもいとあるましき御ことになむときこえ給をふかうもくみはかりたまはぬなめりかしとつらうおもひきこえ給ふ宮す所の御身のくるしうなり給らむありさまいかなるけふりの中にまとひ給らんなきかけにても人にうとまれたてまつり給御なのりなどのいてきけることかの院にはいみしうかくし給ひけるを、のつから人のくちさかなくてつたへきこしめしけるのちいとかなしういみしくてなへての世のいとはしくおほしなりてかりにてもかの、給けん有様のくはしうきかまほしきをまをにはえうちいてきこえ給はてた、なき人の御有様のつみからぬさまにほのきくことの侍しをさるしるしあらはならてもおしはかりつたへつへきことに侍りけれとをくれしほどのあはれはかりをわれぬことにて物のあなたおもふ給へやらさりけるかものはかなさをいかてよいひきかせんひとのすゝめをもきゝ侍りて身つからたにかのほのほをもさまし侍りにしかなとやう／＼つもるになむおもひしらるゝこともありけるなとかすめつゝその給ふけにさもおほしぬへきことゝあはれにみ奉り給ふてそのほのをなむたれものかるましきことゝしりなからあしたの露のかゝれるほとは思ひすて侍らぬになむもくれんかほとけにちかきひしりの身にてたちまちにすくひけむためしにもえつかせ給はさらむ物からたまのかんさしすてさせ給はんもこの世にはうらみのこるやうなるわさなりやう／＼さる御心さしをしめ給てかの御けふりはるへきことをせさせ給へしかおもひたまふること侍りなからものさばかりきやうにしつかなるほいもなきやうなる有様にあけくらし侍りつゝ身つからのとめにそへていましつかにとおもひ給ふるもけにこそ心をさなきことなれなど世中なへてはかなくいとひすてまほしきことをきこえかはし給へとなをやつしにくき御身の有様ともなりよへはうちしのひてかやすかりし御ありきけさはあらはれたまひて上達部ともまいり給へるかきりはみな御をくりつかうまつり給ふ春宮の女御の御有様ならひなくいつきたて給へるかひ／＼しさも大将のまたいと人にことなる御様をもいつれとなくめやすしとおほすになをこのれせいゐんを思ひきこえ給御心さはすくれてふかく哀にそおほえ給院もつねにいふかしう思ひきこえ給ひしに御たいめんのまれにいふせうのみおほされけるにいそかされ給てかく心やすきさまにとおほしなりけるになん中宮そ中／＼まかて給ふこともいとかたうなりてたゝひとの中のやうにならひおはしますにいまめかしうなか／＼むかしよりもはなやかに御あそびをもし給ふなに事も御心やれる有様なからたゝかの宮す所の御ことをおほしやりつゝをこなひの御心すゝみにたるを人のゆるしきこえ給ましきことなれはくどくのことをたてゝおほしいとなみいとゝ心ふかう世中をおほしとれるさまになりまさりたまふ